「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書

ジェンダー平等や多様性配慮への気づき
防災意識の向上
「持続可能な社会の創り手」の育成

×

２０２２年３月

一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと

もくじ

第１章　本調査の趣旨
１　男女共同参画の視点を取り入れた防災教育の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・１
２　「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」の必要性・・・・・・・・・・・・・・・２
３　中学生の「防災教育プログラム」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
４　防災教育プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

第２章　「避難所運営訓練（体験）」を通じた学習成果
Ⅰ　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
１　目的
２　調査の概要
Ⅱ　調査の結果
Ⅱ－１　中学生の気づきと学び
１　参加者の全体像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
２　体験を通じての気づきや行動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
３　ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成・・・・・・・・・・・・・・・９
４　意思決定の場に自ら参画する態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
５　災害や困難を乗り越えて生きていく態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Ⅱ－２　教員の気づきと学び
１　防災教育について（現状）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
２　学校における防災教育について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
３　地域みらいねっとの「防災教育プログラム」について・・・・・・・・・・・19
Ⅲ　参考資料「調査票（単純集計票付）」
１　中学生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
２　教員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

第３章　中学生の「防災教育プログラム」の成果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・26
１　中学生を対象としたアンケート結果から
２　教員を対象としたアンケート結果から
３　おわりに

資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

Ⅰ　本調査の趣旨

2019 年から３年間、青森市内の中学生を対象とした「防災教育プログラム」の集大成として、実践プログラム内容が目的に対してどのような意識変容や行動変容につながっているかを調査・分析し、「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」の成果を可視化し、全国への波及をめざして、本調査報告書をとりまとめた。

１　男女共同参画の視点を取り入れた防災教育の経緯

2011 年３月 11 日　東日本大震災

2012 年～2016 年　男女共同参画の視点を取り入れた防災の取組み

この取組みは、「あおもり被災地の地域コミュニティ再生支援事業実行委員会（以下、あおもり被災地）」[1] が実施したものである。実行委員長は一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと（以下、地域みらいねっと）代表理事の小山内であり、実行委員会のメンバー等が現在、理事として関わっている。

活動の目的と内容は東日本大震災の教訓を活かして、地域防災力の向上をめざし、ジェンダー視点を取り入れた防災活動の必要性や女性リーダーの育成が必要と考え、４つの柱で取り組んだ。

①避難所運営訓練の取組み　②地域人材育成事業　③教材開発　④　情報発信事業

2017 年　**一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと　設立**

あおもり被災地の取組みを引き継ぎ、地域、学校、行政を対象に「男女共同参画の視点を取り入れた防災」に取り組む。

以後、青森県内をはじめ、全国各地で講演活動や避難所運営訓練を実施。青森県防災危機管理課の依頼を受けて県内３箇所で女性防災リーダーの育成に取り組む。また、青森県主催の原子力災害時の避難所開設・運営訓練で男女共同参画の視点を取り入れた避難所づくりのコーディネーターや市町村の防災訓練や地域防災活動、人材育成に取り組んでいる。

2018 年　防災＆コミュニティカフェ開催（以後、毎年開催）

2019 年～2021 年　青森市内中学校で「防災教育プログラム」をのべ 36 校 6,200 人を対象に実施

2020 年　令和 2 年度程ヶ谷基金男女共同参画・少子化関連顕彰事業にて「活動賞」を受賞

2021 年 3 月　「東日本大震災から 10 年～その時、わたしは。そして未来への課題～」の開催

2021 年 11 月　ぼうさいこくたい 2021 にセッションで参加（釜石市で開催）

2021 年 12 月　第５回ジャパン SDGs アワード「特別賞」受賞[2]

2　「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」の必要性

1　地域防災の課題

昨今の災害の状況を見ると、全国各地どこでどのような災害が起きてもおかしくない状況にある。そのような中、青森県の自主防災組織率は 55.4%（令和２年４月現在）と全国でも沖縄県に次ぐ低さである。青森県をはじめ各市町村においても自主防災組織の擁立に向けた施策を進め、取り組んでいる。しかしながら自主防災組織がこれまでの町内会中心では要員の高齢化などにより限界が見えつつある。地域での防災を持続可能な活動として続けるためには、高齢化する町内会と小中学校の児童生徒や保護者が、防災拠点である小中学校を中心に連携し取り組み、地域防災力の向上につなげていくことが必要と推察した。

2　学校教育における「防災教育」の現状

2013 年に改訂された文部科学省の「学校防災のための参考資料―「生きる力」で育む防災教育の展開」によると、学校教育における防災教育の狙いとして、「知識、試行・判断」、「危機予測、主体的な行動」、「社会貢献、支援者の基盤」の３点が重視されている[3)]。

また、2015 年に策定された仙台防災枠組[4)]では、「子供と若者は変革の主体であり、法律、国内での慣習、教育プログラムに則り、防災に貢献できるように、物理的空間と手段が与えられる必要がある」と述べられている。

しかし、学習指導要領ではレジリエンス、すなわち、被災したあと、いかにその状況を乗り越えていく力を身につけるかという側面は見られず、「防災」、つまり、被災してもその被害を最小限に食い止められるように知識を得、規律を体得することのみに焦点が置かれている。

この課題に対して、寺崎・中島は①既存の教科内容にこだわることなく、学ぶべき知識、身につけるべき技能が新たに模索されるべきである。②「知識、試行・判断」、「危機予測、主体的な行動」、「社会貢献、支援者の基盤」の大部分を工学や地理学など、自然科学系の知識が占めており、社会学や経済学など、社会科学系の知識が重要視されていない。③防災計画や避難所の運営に積極的に関与していく態度の育成をしようとする側面が弱いとの指摘をしている[5)]。

本調査の観点からいえば、寺崎・中島は災害時に顕著に表出しがちなジェンダー問題を解決するためにも、日常的に男女ともに生活スキルを上昇させ、女性に家庭生活の維持とケア労働の負担、男性に賃労働の負担が偏らないようにするため、ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成を具体的な教科内容として取り入れる必要がある。また、防災計画や避難所の運営に積極的に関与していく態度を育成しようという側面が弱い。とりわけ、避難所の運営や意思決定過程に女性が少なく、そのことが避難生活の困難の一因となっている現状に鑑みると、これらのことを担える女性リーダーの育成は学校教育を通した防災教育のもっとも大きな課題といえる。同時に、このような態度形成は、被災したあと、それをどう乗り越えるかというレジリエンスを培うこと

にもつながる[6]とも述べている。

これらの課題解決に向けた防災教育が、「災害に対する女性の脆弱性を学校教育のなかで軽減すること」にもつながる。

3　中学生の「防災教育プログラム」について

地域みらいねっとでは、東日本大震災の教訓を受け、地域にいる多様な人たちが誰一人取り残されない地域防災、避難所運営をめざし取り組んできた。それは、前述の課題解決につながる「防災教育プログラム」であると考え実施してきた。なお、地域みらいねっとでは中学生防災教育プログラムをＡパターンからＤパターンまで４つのプログラムがあり、今回の調査ではＣパターンとＤパターンの「避難所運営体験」にフォーカスして分析していく。

「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書は、次の3つの観点から取組内容を検証した。

(1)　ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成
(2)　意思決定の場に自ら参画する態度
(3)　災害や困難を乗り越えて生きていく態度

1　ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成

目　　標：ジェンダー規範・固定的な性別役割分担意識の解消
　　日常的に、男女ともに生活スキルを上昇させる
ポイント：女性に偏っている家庭生活の維持・ケア役割の負担・非正規労働者の不安定労働などに気づく

東日本大震災における避難所運営での課題	防災教育プログラム学習活動における課題提示内容	アンケート質問内容
・炊出しが一部の人（女性）に偏った	・女性に偏る家庭生活の維持（食事を作る、掃除・洗濯をする）	○「男は仕事・女は家庭」という考え方がありますが、あなたはこの考え方についてどう思いますか ○あなたは家の中で、食事のしたくやそうじ、洗たくのような家事は、誰がやるのが一番良いと思いますか ○女性が仕事を持つことについて、どのように考えますか
・保育園や介護施設が被災したことで、女性のケア労働の負担が増した。それによって仕事を辞めざるを得なくなった人もいた	・ケア役割の負担（子どもの世話、高齢者の世話） ・非正規労働者が先に解雇になり、その多くが女性	

２　意思決定の場に自ら参画する態度

目　　標：女性リーダーの育成
　　レジリエンスを培う（被災したあと、それを乗り越えていく力）
ポイント：防災計画や避難所の運営に女性が積極的に関わる
　　女性防災リーダー育成、女性でも発言できる

東日本大震災における避難所運営での課題	防災教育プログラム学習活動における課題提示内容	アンケート質問内容
・プライバシーと安全に配慮のない避難所運営	・着替えのスペースがない ・男女共用のトイレ ・性被害、性暴力の問題	○高齢者や障害者、妊産婦、乳幼児を抱えた人などへの配慮が必要である(自由記述) ○普段では気づかないことに気づいた(自由記述) ○防災教育プログラムの中で、自分の考えを言うことができた ○防災教育プログラムの中で、他の人の考えを聞くことができた ○防災リーダーは男性が向いている
・避難所における環境改善の提案、発言ができない(「非常時なんだからこれぐらい我慢」)	・生理用品を1日1個しかもらえなかった ・下着を選ぶことは贅沢だ	
女性リーダーの不在	・リーダーは男性ばかり(特に高齢者)で女性や妊産婦や子供のニーズをくみ取れなかった ・町内会・自主防災組織の役員は男性。女性の声が届かない	

３　災害や困難を乗り越えて生きていく態度

目　　標：被災した後、その状況を乗り越えていく力を身につける（レジリエンス）
　　『誰かの役に立っている・役に立ちたい』という自己効力感の向上
ポイント：仲間、人とのつながり、助け合う力
　　社会資源とつながることができる・活用できる
　　地域への愛着心・連帯度の育成

東日本大震災における避難所運営での課題	防災教育プログラム学習活動における課題提示内容	アンケート質問内容
・災害関連死の増加 ・地域防災における若年層の不在	・気仙沼市階上中学校の取組み ・青森市沖館中学校の避難所運営	○災害時や避難所で、性別(男性もしくは女性)によってニーズが違う(自由記述) ○体験の中で、気づいたことや考えさせられたことはありましたか(自由記述) ○中学生でも地域のために役に立てることがある(自由記述)

4　防災教育プログラム

避難所運営体験　C パターン（120 分コース）

11：30	事前準備	荷物の搬入・打合せ・モデルルームの設営
12：15		休憩（給食）
13：00		役割のある生徒集合・説明・待機
13：20	コロナ禍の避難者受入訓練	・健康チェック、ゾーニング ・居住区分への誘導 ・ゾーニングの説明
13：35		モデルルームの説明（右写真参照） 非常持ち出し袋等の説明
13：50	講話１	「誰もが安心できる避難所とは」 ・感染症予防の避難所 ・過去の避難所生活から振り返ってみよう
14：10	体操	エコノミークラス症候群予防体操・休憩
14：20	講話２	「中学生が力を発揮する」 ・中学生が地域でできること ・安心できる避難所基礎知識
14：50	避難所ミニ体験・見学	・床に寝てみる体験/段ボールベット体験 ・簡易トイレ（凝固剤のデモンストレーション） ・モデルルームの見学
15：10	まとめ	今日の学びのふりかえり
15：20	終了	片付け（スタッフ、教員、一部生徒）
15：40	撤収	撤収・スタッフふりかえり

避難所運営体験＋ワークショップ
D パターン（180 分コース）

10：50	事前準備	荷物の搬入・打合せ・モデルルームの設営
11：30		要配慮者の支援について考えるワークショップ ・グループワーク ・発表
12：15	昼食	
13：20	講話	「誰もが安心できる避難所とは」 ・感染症予防の避難所 ・過去の避難所生活から振り返ってみよう ・安心できる避難所とは
13：50	班別行動の説明	・訓練説明（実施内容、避難所の区分けなど） ・班別顔合わせ
14：00	班別訓練	①　総務班（受付・情報掲示板） ②　居住スペース班 ③　要配慮者スペース班 ④　乳幼児世帯班 ⑤　授乳・おむつ交換・コミュニティスペース班 ⑥　避難所ルール班 ⑦　聞き取り班（外国人、80 代高齢者） ⑧　フェースシールド班 ⑨　防護服班
14：30	全体訓練	①　各班からの発表（ポイント及び工夫した点など） ②　避難所見学 ③　避難所閉鎖 ④　エコノミークラス症候群予防体操
15：00	まとめ	・生徒からの感想 ・校長先生から講評 ・生徒からお礼の言葉
15：15	終了	片付け（スタッフ、教員、一部生徒）
15：40	撤収	撤収・スタッフふりかえり

中学生の「防災教育プログラム」の詳細は、地域みらいねっとホームページ「中学生の防災教育プログラム事例集」、または右記ＱＲコードからみることができます。

【参考資料・文献】
1）あおもり被災地の地域コミュニティ再生支援事業実行委員会.「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」. http://www.aomoricombiz.co.jp/hinanjyo/, (2021-12-10)
2）外務省.「ジャパン SDGs アワード」. https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/award/index.html, (2022-02-20)
3）文部科学省.「学校防災のための参考資料　「生きる力」を育む防災教育の展開」. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1334780_01.pdf., (2021-12-10)
4）2015 年 3 月 14 日から 18 日にかけて、宮城県仙台市で「第 3 回国連防災世界会議」が開催された。今後 15 年間におよぶ国際的な防災枠組を策定することが主な目的。
5）寺崎里水、中島ゆり.「災害リスクを軽減する防災教育の検討―ジェンダーの視点から」. 生涯学習とキャリアデザイン. https://hosei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13365&item_no=1&page_id=13&block_id=83, (2021-12-10)
6）寺崎里水、中島ゆり、同上

第２章　「避難所運営訓練（体験）」を通じた学習成果

Ⅰ　調査の概要

1　目的

2019 年から 3 年間、青森市内の中学校で取り組んできた「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」の成果を可視化し、学校教育における必要性の理解および普及につなげ、今後の地域防災活動への方向を示したい。

また、「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」をとおして、災害に対する女性の脆弱性をいかに学校教育で軽減することができるかもあわせて検証する。

2　調査の概要

（1）　アンケート調査の内容

上記の目的を達成するため、「青森市中学生防災教育プログラムのアンケート」を作成し、実施校の参加生徒と参加教員に回答を求めた。アンケートは「中学生」と称し、参加生徒を対象としたもの、「教員」と称し、参加した教員を対象としたものと２種類を作成した。

なお、「中学生」対象のアンケートは、事前アンケートと事後アンケートの２種類を作成し、回答内容を比較した。

1）中学生

[事前アンケート内容]

Ⅰ　回答者の属性　Ⅱ　防災とジェンダーの観点から

[事後アンケート内容]　Ⅰ　回答者の属性　Ⅱ　防災教育での達成度（意識や行動面での積極性）Ⅲ　防災とジェンダーの観点から　Ⅳ　避難所運営体験の様々な場面における具体的な気づき

〔回収数および有効回答数〕

	事前アンケート	事後アンケート
回収数	1154	975
有効回答数	1154	975

＊上記の数字は、C、D パターンの実施校の回答数である。また、青森市立北中学校では小中連携事業の一環で実施したことにより、回答者の中に小学生も含まれている。

2）教員

〔アンケート内容〕　Ⅰ　回答者の属性　Ⅱ　学校における防災教育　Ⅲ　防災教育プログラムについて　Ⅳ　中学校における防災教育について

〔回収数および有効回答数〕

	教員
回収数	67
有効回答数	67

（2）　調査の方法

いずれも、対象者に web アンケートでインターネットアンケートフォームへの入力で回答を依頼した。アンケートは、中学生事前アンケートは防災教育の実施前に入力回答し、事後アンケートは防災教育終了後翌日以降の回答を依頼した。教員については、防災教育プログラムの授業に参加した教員が回答している。

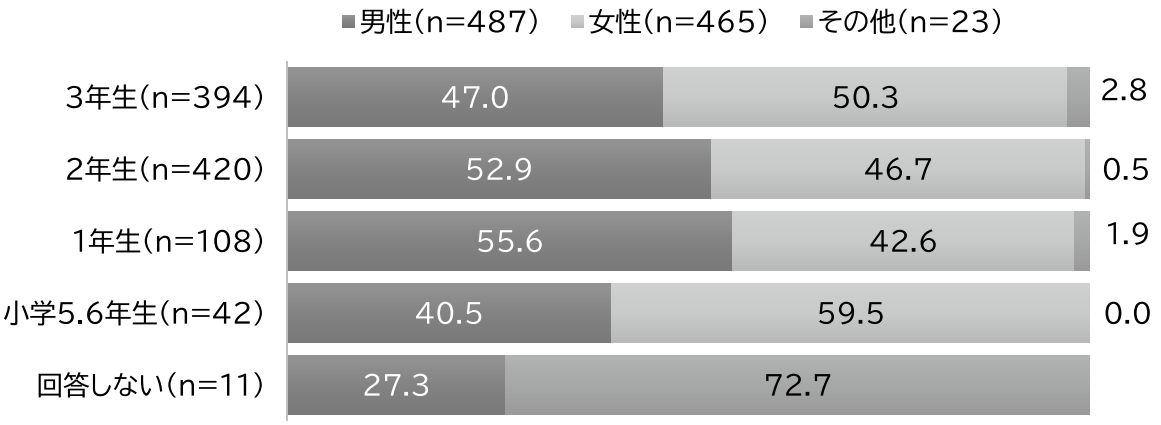
Ⅱ　調査の結果

Ⅱ-1　中学生の気づきと学び

1　参加者の全体像

単純集計から見られる回答者の構成は、男女比が約５対５であった。地域・学校での防災訓練への参加経験は６割以上が初めてとなっている。学年ごとの男女比は図表１－１のとおり。なお、性別で「その他」との回答者も２．４％いたが、今回の調査分析においては男性と女性で比較していく。

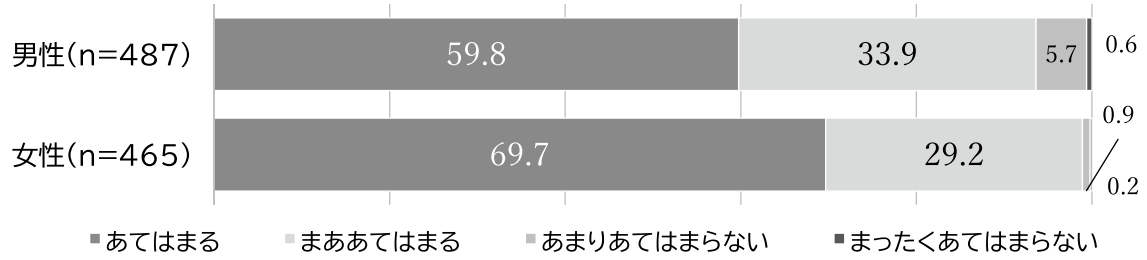
図表１－1　学年構成（事後アンケート）



2　体験を通じての気づきや行動

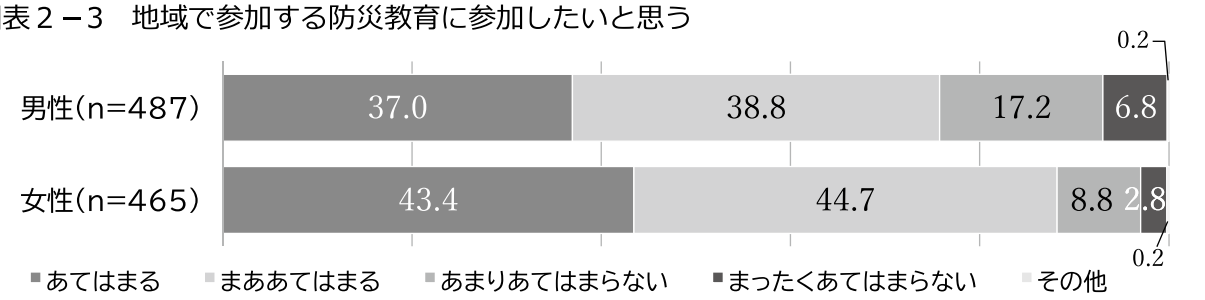
「防災教育プログラムに参加していかがでしたか」として、７項目について「あてはまる」から 「まったくあてはまらない」までの４件法で質問した。これらは体験を通じての学びや行動を評価するものであり、体験の達成度としてみていくことにする。なお、７項目のうち、「防災教育プログラムで自分の考えを言うことができた」「防災教育プログラムで他人の考えを聞くことができた」の２項目については、４の意思決定の場に自ら参画する態度で分析する。各項目について男女別に比較をしたものが図表２-１～４である。

図表２－1　災害時をイメージして考えることができた

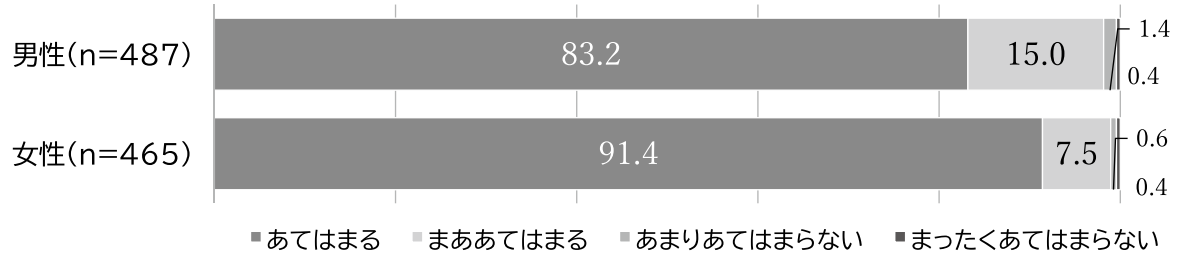


図表２－２　地域には要配慮者といわれるいろいろな人がいることを考えることができた

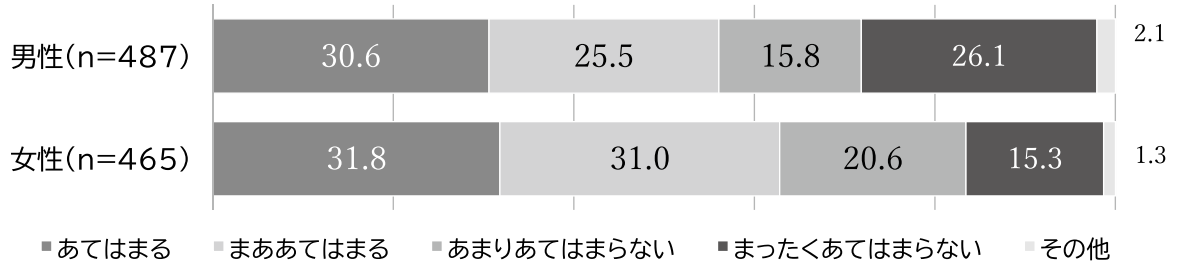
図表２－３　地域で参加する防災教育に参加したいと思う



図表２－４　全体を通じて、「命の大切さ」を理解できた



図表２－５　実施後、防災について家族で話をした



また、この５項目について「あてはまる」を４点、「まああてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「まったくあてはまらない」を１点として「達成度」として算出した。

図表２－６　男女別の達成度の平均値

	男性（累計）	**男性（平均値）**	女性（累計）	**女性（平均値）**
達成度の平均	16.74	3.35	17.54	3.51

「あてはまる」「まああてはまる」を合わせて見ると、回答の傾向にそれほど男女で違いは見られないが、図表２－６の達成度の平均値でみると男性よりも女性が高いことがわかる。

図表２－１と図表２－２については「あてはまる」を積極的に選択した、という意味で「あてはまる」の回答のみで男女の傾向を見ることにしたい。図表２－１「本当の災害時をイメージして考えることができた」、図表２－２「地域には要配慮者といわれるいろいろな人がいることを考えることができた」この２項目では、女性の方が男性に比べて「あてはまる」に回答している率が高い。本プログラムの避難所運営体験は、特に避難所のモデルルームや講話のなかで「女性への配慮」や「男女共同参画の視点」といったことが組み込まれている。また、避難所のモデルルームを設置していることで、女性の方がリアルに気づきや学びを得やすかったことが推察される。

また、防災教育プログラムでは災害時の非常持ち出し袋などを紹介し、その際に「家で準備している人はいますか」と問いかけている。残念なことに、非常持ち出し袋を家庭で準備している生徒（認識している生徒）は１割に満たなかった。「今日の避難所運営体験の内容や非常持ち出し袋を家に帰ったら家族と話し準備しましょう」と語りかけたことで、図表２―5 のとおり、家で話題にした中学生は約６割であった。本事業は、学校での防災教育をとおして、家族、地域への防災意識の向上もめざしており、今後更なる工夫も必要と考える。

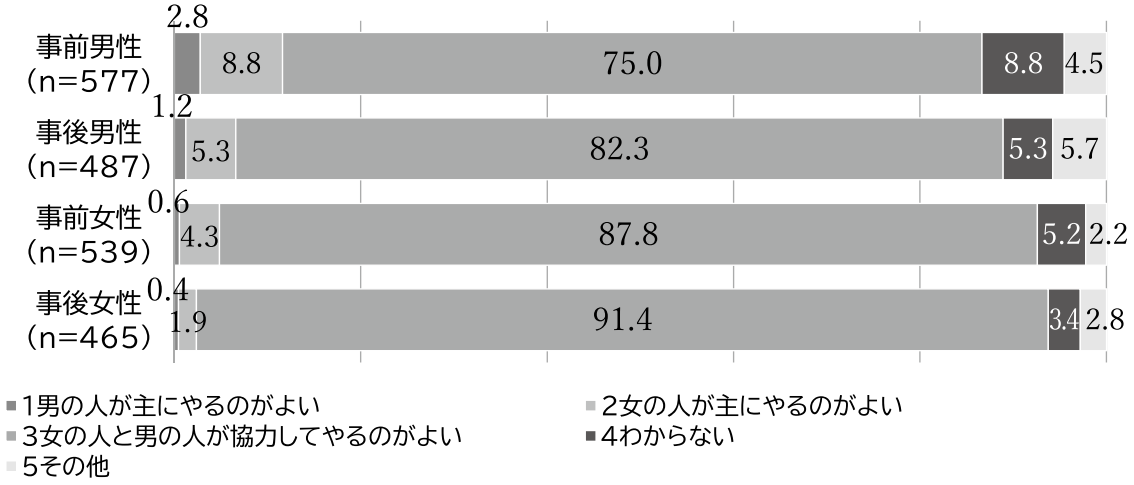
３　ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成

講話や多様性配慮の避難所のロールモデルを示し、東日本大震災時の避難所において家庭生活の維持とケア役割が女性に偏っていたことを伝えた。防災教育の実施前と実施後に同じ質問をして、意識の変化を比較した。

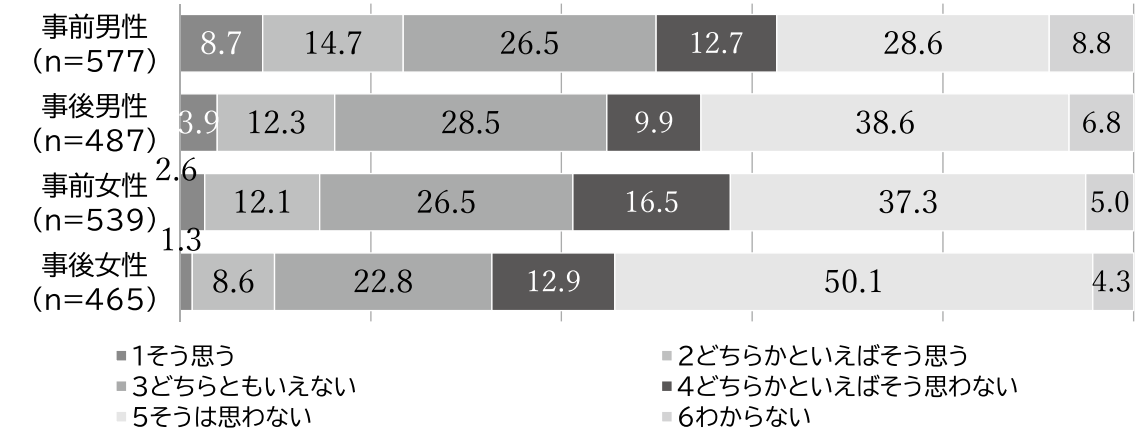
その結果は図表３－１～3 のとおり、事前アンケートと事後アンケートの結果を比較すると、固定的な性別役割分担の意識に変化がみられた。日常必要な生活スキルの家事について「女の人と男の人が協力してやるのが良い」、男は仕事・女は家庭については「そう思わない」が増えている。

なお、図表 ３－３の女性が仕事を持つことについては「どちらでもよい」の回答が男女ともに増えてはいるものの、女性が仕事を持ち続けることについては事後で減少している。中学校におけるキャリア教育の現状として職業講話はあっても、自身の自立（生き方）に関する中長期的な視点に立ったジェンダー視点を取り入れたキャリア教育がなされておらず、この質問の意図を理解するに及ばなかったと推察される。

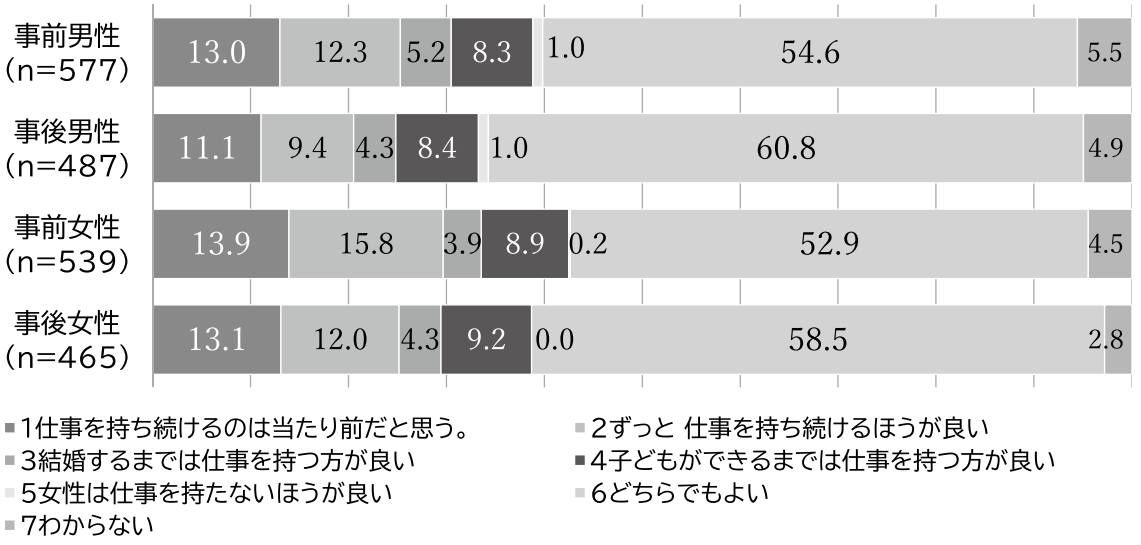
図表３－1　食事のしたくやそうじ、洗濯のような家事は、誰がやるのが一番良いと思うか



図表３－２　「男は仕事・女は家庭」という考え方について



図表３－３　女性が仕事を持つことについて、どのように考えますか



図表３－４は「男は仕事・女は家庭」という考え方について５件法で質問した回答を、「そう思う」を１点、「どちらかといえばそう思う」を２点、「どちらともいえない」を３点、「どちらかと言えばそう思わない」を４点、「そうは思わない」を５点とし、「わからない」は外して得点換算し総和を尺度得点とした。そのうえで、事前と事後の伸び率を表したところ、伸び率の男女差は少なかった。

図表３－４　男女別の単純尺度と伸び率

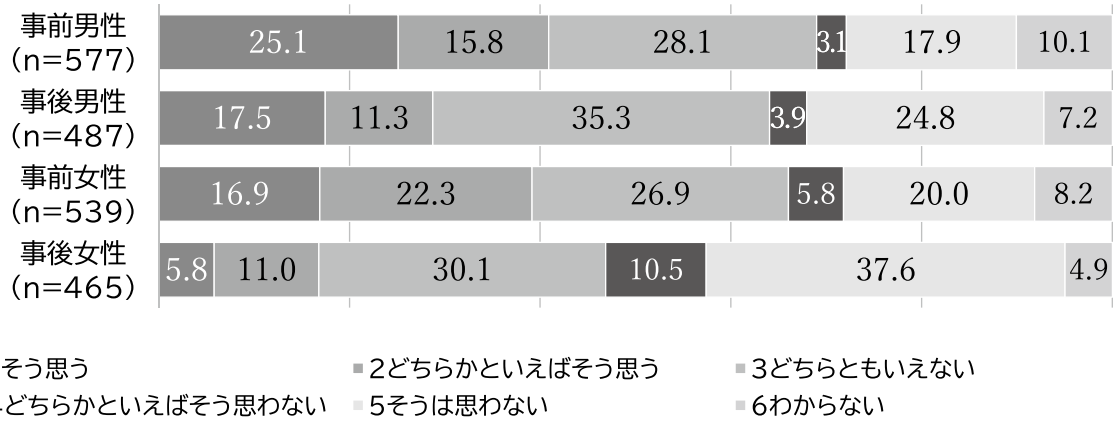
	事前	事後	伸び率
男性	3.41	3.72	1.09
女性	3.78	4.07	1.08

４　意思決定の場に自ら参画する態度

東日本大震災時の避難所では女性が運営リーダーにほとんどいなかったことにより、女性をはじめ多様な人たちに困難があった。講話でイラストを見せながらその事例を伝え、意識の変化を調べた。

その結果は図表４―１のとおり、事前と事後で比較すると、防災リーダーは男性が向いているに対し、「そう思わない」の回答が男女ともに増え、明確に意識の変化がみられる。また、防災教育プログラムの最後に女性の代表生徒から「地域みらいねっとさんのように自分も防災リーダーになりたい」という発言があったことからも、地域みらいねっとのメンバーが女性であることで、私たち自身が生徒にとってのロールモデルとなり得たことも多少なりとも影響していると推察できる。教員からも同じような回答があった。

図表４－１　防災リーダーは男性が向いている



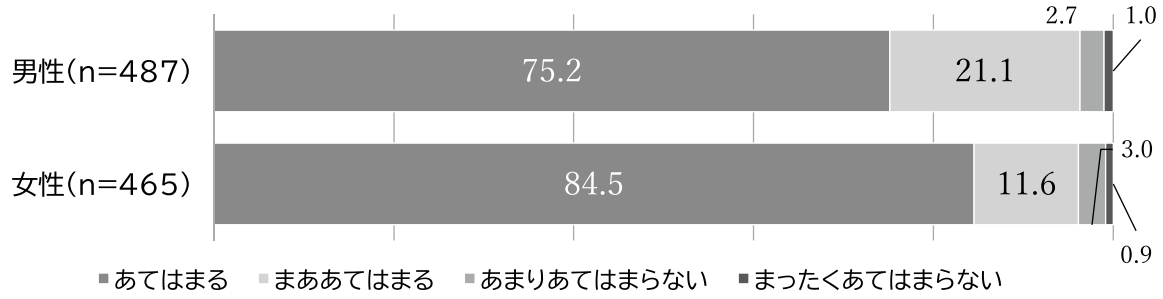
図表４－２では５件法で質問した内容を、男女別で事前事後の伸び率を比較した結果、女性が高かったことがわかる。本事業での避難所運営体験は、「女性リーダーの必要性」などが組み込まれていることから、女性の方がリアルに気づきや学びを得やすかったことが推察される。

図表４－２　男女別の単純尺度と伸び率

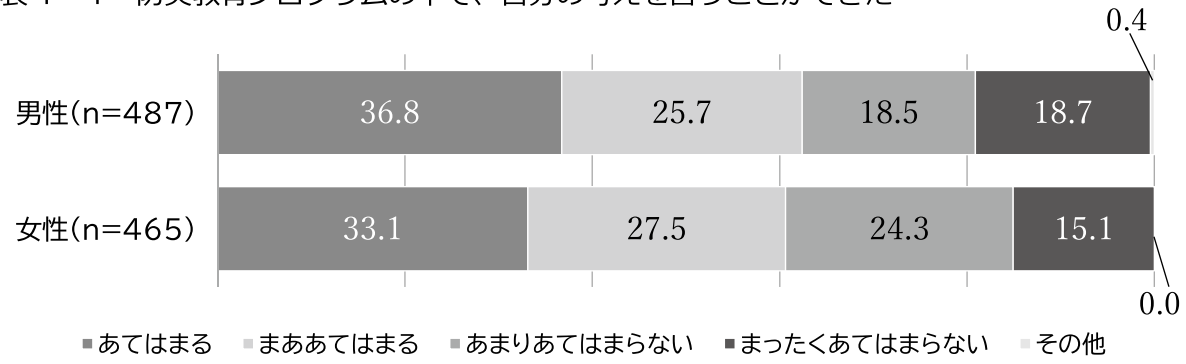
	事前	事後	伸び率
男性	2.70	3.08	1.14
女性	2.89	3.67	1.27

図表 ４－３～４は、避難所運営体験での取り組み姿勢をどのように自己評価しているかを問いたものである。防災教育プログラムでの明確な議論の場面はなかったことから、日常における自己評価と捉えてもよいかもしれない。以下では「あてはまる」を積極的に選択した、という意味で「あてはまる」の回答のみで男女の傾向を見ることにしたい。ここから見えることは、「自分の考えを言うことができた」が 3.7 ポイントで男性が高かった。一方、「他の人の意見を聞くことができた」は女性の方が 9.3 ポイント高かった。

図表４－３　防災教育プログラムの中で、他の人の考えを聞くことができた



図表４－４　防災教育プログラムの中で、自分の考えを言うことができた



図表４－５は２つの項目を「あてはまる」を４点、「まあまああてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「あてはまらない」を１点とし、「達成度」として算出したものである。「自分の考えを言う」は男性が、一方、「他人の考えを聞く」は女性が高いことがわかる。

図表４－５　男女別の達成度の平均値

	自分の考えを言う	他の人の考えを聞く
男性	2.81	3.70
女性	2.79	3.80

５　災害や困難を乗り越えて生きていく態度

気づきや考えの男女別の記入率は図表５－１のとおりである。どの項目も男性よりも女性の記入率が高い。

図表５－１　男女別気づきや考えの記入率　（%）

	男性	女性
中学生でも地域のために役に立てることがある	85.6	92.3
災害時や避難所で、性別(男性もしくは女性)によってニーズが違う	76.6	86.5
高齢者や障害者、妊産婦、乳幼児を抱えた人などへの配慮が必要である	79.5	90.1
普段では気づかないことに気づいた	41.7	47.1

＜中学生でも地域のために役に立てることがある＞

「学校のつくりや物品のことを良く知っているのは地域住民ではなく自分たちだ」という記述が大変多く見られた。このことは講師が促すことによって得た気づきではあるが、多くの生徒が「なるほど」と感じた場面だったことが分かる。さらに、「学校の構造や物品の置き場所を確認しておこうと思った」という意見も複数あり、このことから「災害や困難を乗り越えていく態度」が主体的から、さらに自発的な態度を生じたことがわかる。

特に多く見られたのは「力仕事」であり若さと体力面に自信がある様子がわかる。その自信を避難所で活かす意欲が「自分たちは支えられる側ではなく、支える側だった」という言葉に表れたのではないか。

また、避難所で自分ができると感じた行動が事細かに、しかも多岐にわたり記述した生徒が多く見られた。このことから、生徒が避難所を漠然としたイメージではなく、生活する場として具体的に想像することができたと推測できる。

プログラムを受けた後では中学生としての意識が高くなったことがコメントから良く伝わってくる。自分も地域の役に立つと思うことが、人としての喜びだと感じた様子が、とても頼もしく、高齢化する地域の希望が満ちあふれているように感じる。

図表５－２　中学生でも地域のために役に立てることがある（自由記述）

※類似するコメント数

内容のカテゴリー		主なコメント	※
中学生としての意識	通っている中学校が避難所になる	・学校の中のどこに何があるかなどを知っているのは、地域の人よりも中学生の方だから、みんなの役に立てると思う ・もし、自分の学校が避難所になったときのために、学校の構造やマットなどの物品の置き場所を確認しておこうと思った ・今までは避難所の運営は全て大人がやるものだと思っていたが、学校のことをよくわかっている中学生だからこそ運営を手伝えると思った	144
	体力への自信	・力仕事や体力が必要な仕事で地域のために役立つことができる ・重い物を運んだり、物資を届けることは中学生でもできることなので率先して手伝おうと思った	123

	中学生としての気づき	・今までは危機感がなかったし、中学生が役に立つことはないと思っていたが、災害は誰にでも身近なものであり、中学生は大人にとっても年下の子の役にも立つ重要な役割であることを知ることができた ・中学生だからこそできることがたくさんあった ・中学生が協力することで避難してきた人たちに勇気や元気、希望を与えられ、ちょっとでも笑顔になれると思った ・中学生でもどうしたらいいか、どんどん発言をしていけばいいと思う ・中学生は支えられる側ではなく、支える側だということに気づいた	78
避難所開設に関する気づき	設営	・ダンボールベットやファミリーテントの作り方が分かったので、災害が起きたときは役立つ ・段ボールベット、赤ちゃんのおむつ交換スペースなど様々な設営をする	63
	運営	・生徒会で避難所の運営をする ・積極的に避難所の運営に参加することが大切だと思った	15
	具体的な気づき	・誘導　・案内　・受付(検温係)　・炊き出し　・配膳 ・清掃　・ゴミ分別　・フェイスシールド、防護服づくり ・物資を配る　・生理用品や下着は女子中学生が(配布を)やれる ・体操を呼びかける　・掲示板に情報を書く　・呼びかけ ・被災者を保護する　・不安な人に寄り添える　・声がけ　・励ます ・落ち込んでいる人たちを楽しませるような企画を考える	154
	要配慮者への気づき	・高齢者や障がい者(視覚障がい)には案内や誘導が必要 ・授乳スペースが必要　・小さい子どもの遊び相手 ・英語の授業を活かして外国人と会話　・聴覚障がい者には筆記 ・様々な事情を抱えた人たちがいることを理解し、普段から周りのことを考え思いやる気持ちを大切にしていれば、何が起こっても優しい心で受け入れられると思う	144
	心構え	・皆が安心して過ごせるような環境を作っていきたい ・自分の得意なことを生かして積極的に手伝うことができる ・自分の命を守りながらも、他人にも気を配ることが必要だとわかった	107
地域への視点		・中学生としてできることをすることで、それが地域の方々のためになることがわかった ・地域は高齢者が多いので、私たちがやらなくてはいけないんだと思った ・災害時だけでなく、普段から地域の交流の場でも力になる	45
個人の備え		・非常持ち出し袋の用意　・危険マップ作成　・避難経路の確認	17
感想		・男の方が力があるけど女も必要だと思った　・工夫がたくさんあった	26

＜災害時や避難所で、性別（男性もしくは女性）によってニーズが違う＞

図表３－１～３（１０ページ）の結果からは固定的な性別役割分担意識が事前に比べて事後では明らかな改善が見られたものの、自由記述の女性の役割、男性の役割からは中学生でさえ固定的な性別役割分担意識が根強いことがわかる。

また、解決しようとする力に分類したように、現在の課題を見つけそれに向き合おうとするのが女性に多いことにも注視したい。

今回のアンケートは「ジェンダー視点の防災教育の必要性」を調査することが目的の一つであったが、これらのことから学校教育でも家庭教育でも担うことができない部分を外部講師（防災教育プログラム）で補填する必要があると感じる。

さらに平等であるべきとの記述も複数見られたが、中学生が考える平等は配慮とは対義する考え方となりかねないことから、弱者の視点に立つことも伝えていく必要を感じる。

図表６－１　災害時や避難所で、性別（男性もしくは女性）によってニーズが違う

※類似するコメント数

カテゴリー	男性の主なコメント		※	女性の主なコメント	※
性別に関する気づき	違い	・持ち物、価値観、考え方、悩み、食べる量、役割が違う ・男性には分からないことや理解できないことがあることがわかった	60	・ニーズ、必要な物、考え方、価値観が違う ・共感しにくい ・男性にはわからない女性のことや、女性にはわからない男性のことがある	42
		・ニーズは同じ ・ニーズが違うのはよくない	8	・違いはない ・同じ人間	2
女性の役割	・料理などは女　・洗濯、皿洗い　・家事的なこと ・子どもの面倒を見る　・高齢者の世話 ・物資の配布 ・女性は繊細さが必要な仕事をやればいい ・男女違うところはあるけれど、女性は仕事も家庭もしないといけないから大変だ		22	・料理などは女　・家事的なこと ・女性は子どもの面倒を見る ・案内　・受付　・物資の配布 ・女性は指などが器用な人が多いので細かい作業をすればいい	31
男性の役割	・力仕事は男性 ・指揮をとる　・皆を引っ張る　・夜遅くまで働く		29	・力仕事は男性 ・強い男子が防災のリーダーになった方がいい。	31
女性への配慮	・生理用品、下着、化粧品、露出の少ないしっかりとした服 ・女性は大変なことがたくさんある		29	・生理用品、下着（サイズ）、衣服などの配布 ・授乳室など女性のためのスペースが必要 ・妊娠している　・子どもを連れている ・性被害を受けないようにする	53
男性への配慮	・着替えが必要　・ごはん ・男は生活できればいい		5	・男性は女性よりも食べる量が多い ・男性がリーダーをやるべきというのは差別	2
施設・環境	・女性と男性が別々のトイレにすることで女性も安心できると思う ・ダンボールやテントでプライバシーを守る ・性暴力は起こるので、環境をしっかり整えなければだめだ		35	・トイレは男女で分けたほうが安心で安全だ ・お互い（男女）のプライバシーを守るために更衣室を分ける ・仕切りを作るのは大切だ	27
組織・運営	・男女両方のリーダーが必要 ・防災リーダーが男女ともにいることで、双方のニーズに応えることができる		24	・男性と女性で避難所運営をすればいい ・防災プログラムを受ける前は、男性が防災リーダーに適していると思っていたけど、女性じゃなきゃ分からないこともあるので、女性がリーダーをやるのもおかしくないと思った。	64
	・物資を配るときは男性だけでなく女性もいることで女性が安心することが分かった ・女性には女性が、男性には男性が対応することにより、気軽に助けを求められる		35	・女性にしか必要じゃないものや、男性にしか必要じゃないものはあると思うので、物資の配布は同じ性別の人が配布したら、もらう側も安心して手に入れることができる。	35
	・性別は関係ない　・適材適所 ・自分が必要だと思うものは自分で準備する		27		
互いの理解と協力	協力	・男性と女性は協力することが大切	27	・災害時だからこそ性別関係なく協力すればいい	29
	平等	女性の方が大変だからといって女性だけ特別扱いするのではなく、男性、女性ともに平等にしたらいい	15	・性別によって対応を変えるのではなく、平等な判断をしていきたい	9
	理解	・必要なものが違うことをお互いに理解し、尊重することが大切	21	・女性と男性は色々と違うところがあるけど、そのことを理解し合って助け合いながら過ごしたい	25
解決しようとする力				・性別によるニーズの違いや差別などは、非常時だからこそ重視しなくてはならない問題だ ・個人としても必要とすることは違うので、個人個人に向き合うことが大事だ	22

			・女性、男性に関わらず、LGBTの問題もあり差別はしてはいけないと思う	
感想	・災害時の避難では皆ストレスがたまっていて、色々なことに敏感になるので、そういう性別の問題は放置してはいけない内容だと思う ・今までは性暴力や女性に対することで改善しなければいけないことがあることを知らなかったが、多くの女性が困っていることがわかった。	23	・話を聞く前と考えが変わった ・性別についての問題が思ってた以上に深刻で驚いた	33

＜高齢者や障がい者、妊産婦、乳幼児を抱えた人などへの配慮が必要＞

「災害が起きたら近くの避難所へ逃げる」という自分自身のことしか想定していなかった中学生たちが、本プログラムの体験をとおして、自分が住む地域にも事情を抱えた様々な人が住んでいて、そのような人々も自分と同じように避難してくるのだということに気づき、それにどう向き合うべきなのかを考えた記述が大変多く見られた。特に、災害時だけでなく、「日頃から」気にかけていきたいという心がけが複数見られ、地域への関心が高まったことが推測される。

ただ、高齢者・小さい子への配慮は多く見られ、また支援の仕方を具体的に記述していることが多かったが、「障がい者」のことは「障がい者」と一括りにした記述が多く見られることが懸念材料としてあげられる。高齢者や幼児は身近にいて、支援の仕方を想像しやすいが、例えば聴覚・視覚障がい者や身体障がい者は身近にいないため、どんな困りごとが生じるのか想像しにくいのではないかと推察できる。

図表６－２　高齢者や障がい者、妊産婦、乳幼児を抱えた人などへの配慮が必要である

※類似するコメント数

内容のカテゴリー		コメント内容	※
配慮の対象	高齢者	・大きな声でゆっくり繰り返して話をする　・側にいて安心させてあげる ・ゆっくりと歩くペースを合わせて誘導をする	53
	妊産婦	・妊婦はいつ何が起こるか分からないので、専用スペースをつくり付き添いが必要 ・赤ちゃんが騒いでも温かく見守りたい	75
	障がい者	・避難するだけでとても不安。誘導が必要 ・聴覚障がい者にはジェスチャーや紙に書いてあげる	61
	子ども	・一人にできないので中学生が面倒をみる	9
	外国人	・ピクトグラム、絵付きの案内	3
	ゾーン分け	・配慮に見合うスペースを作ったり、声をかけやすい体勢をつくる ・要配慮者のスペースはトイレや出入り口に近いところへ配置する ・体育館だけでなく多目的ホールや教室も利用する	172
	ダンボールベット	・高齢者や身体障がい者が立ち座りしやすいように、椅子やダンボールベットは優先させる	7
	環境	・段差や手すり必要 ・通路に物を置かない ・固い床に長時間いるのは疲れるので、運動用のマットを敷けばいい	55
誘導・案内		・障がい者は避難所に来ると不安なことが多くあることがわかり、このような人を中学生が誘導していけば安心すると思った	26
意識	心配り	・（物資やスペースなど）優先する	20

	具体的なサポート	・優しくゆっくりと声をかけようと思う ・手をつないで一緒に歩く ・重い荷物を持ってあげたり、必要な物を持ってくることなどができる ・避難所の係の人だけでは人手が足りないと思うので、私たちが協力する	67
	心がけ	・今まで自分の避難のことしか考えたことがなかったけど、支援が必要な人も避難してくるので、そういう人たちのことも考える必要があるとわかった。障がいそれぞれによって支援の仕方が違うこともわかった ・たくさんの避難者は各々の問題を抱えているので、その人にしかわからないことや要求に耳を傾けることが大事だと思った ・日頃から助け合っていくことが大切だと思った	368

＜普段では気づかないことに気づいた＞

本プログラムを受けたことで、日常では知ることのなかったジェンダー、また多様性に対する課題が自分の身近にもあることに気づいた生徒が多かったことがわかる。しかも、その課題を背伸びをすることなく生身の中学生として受けとめ、乗り越えようとする力を育むことができているのではないか。その解決し乗り越えようとする態度からは中学生としての正義感も大きく感じられる。

図表６－３　普段では気づかないことに気づいた

※類似するコメント数

内容のカテゴリー		コメント内容	※
ジェンダー		・女子でも力仕事はできるし、男子でも繊細な仕事が得意な人がいるため、その人の特技に合わせて仕事を割り振りすることが大事。 ・男性は普通に気にしないでできることが、女性にとっては気になることがあったのが意外だった。	20
多様性		・思っていたよりも色々な事情を抱えた人が多いことに気づいた。 ・性別が同じでも、年代によっても困りごとが違うので、その解決策を皆で助け合って考えていかなければいけないと思った。	42
中学生としての意識		・避難所では私たちのような子どもは何の役にも立てないと思っていたけど、自分たちにもできることがあるとわかったので、もし災害が起きたときなどはしっかり役に立っていきたい	56
地域への意識		自分一人だけのことではなく、地域の人のことも考え、尊重して支え合って生きていくことが大切だと気づいた。	8
避難所	ダンボールベット	ダンボールベットが丈夫で、しかも固くなく寝心地がよかった。	48
	環境	・感染症の対策をしなければいけないこと。 ・避難所に行けば安心と思っていたが、避難所でのトラブルもたくさんあるのだと知った。	78
	トイレ	避難生活ではごはんと寝るところがあればいいと思っていたけど、トイレも大事だと思った。	20
備え	非常食	非常食は乾パンとカップ麺しかないと思っていたが、種類がたくさんあり驚いた。	22
	防犯グッズ	身近にあるものや 100 円ショップで買える物もあったので、工夫して準備しておきたい。	41
その他		・避難所で性被害にあった人がいるというのが衝撃的だった。助け合わなきゃいけないときに、自分の欲に負けていた人がいるというのは、とても情けなく感じた。そのようなことを防止する策を中学生からも提案できたらいいなと思った。 ・災害時で誰もが不安でいるからこそ、お互いに協力し合い意見を出し合って困難を改善していくことが大切。 ・普段の避難訓練では、自分のことしか気にかけることができなかったけど、今回支援者の役をやってみて、色んな人がいて、色んな支援が必要だということがわかりました。	65

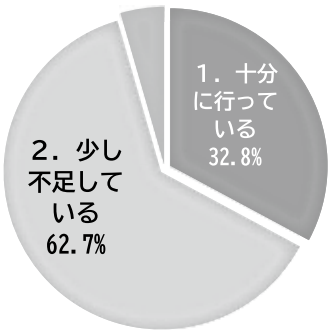
Ⅱ-２　教員の気づきと学び

１　防災教育について（現状）

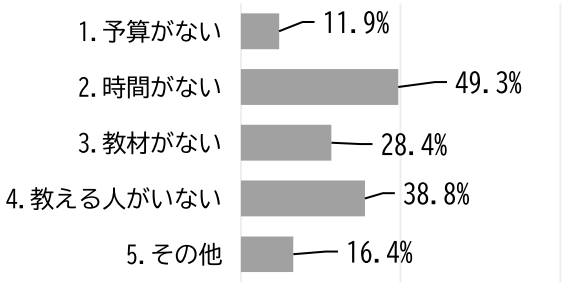
防災教育プログラムに参加した教員にもアンケートをとった。本調査は学校における防災教育のあり方や教員の意識、実施しての感想等に焦点をあて分析を行う。

実施校（４～１２月）１０校から６７人の回答があった。勤務校の防災教育の現状は図表１－１のとおり、約３割の教員は十分行っていると回答している。一方、『不足』との回答者にその理由を質問したところ、図表１－２のとおりである。また、『中学校における困りごと』の自由記述の中に「多忙化する学校教育の中、必要性は感じつつも時間や予算が取れない」という意見も多数あった。「教える人がいない」「教員の多忙化」という課題に対しては、自由記述に『外部講師の活用の必要性』についての記述もあった。活動団体とのパートナーシップによる新しい形での実施が課題の解決につながる可能性がある。

図表１－１　勤務校の防災教育の現状



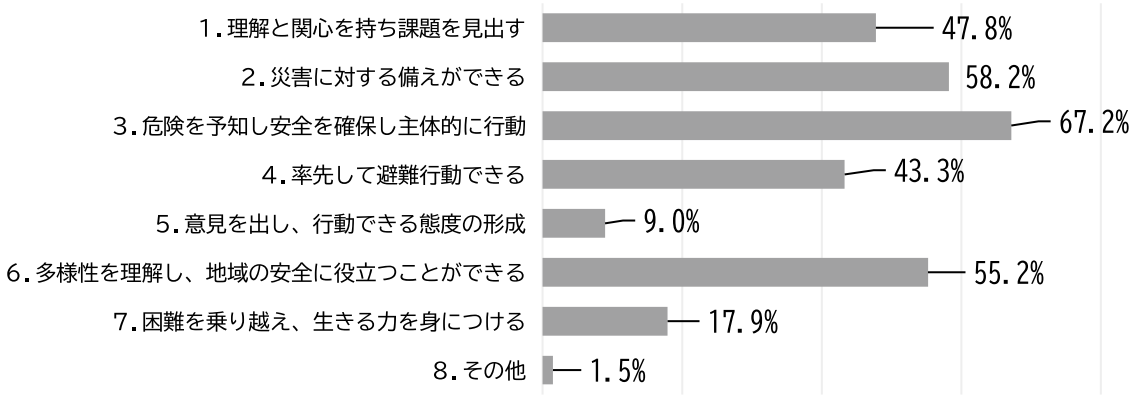
図表１－２　「不足」「少し不足」の理由



２　学校における防災教育について

生徒への防災教育に関して、どのようなことを重視しているか質問したところ、図表２－１のとおりだった。特に、本事業で重要視している６の「多様性を理解し、地域の安全に役立つことができる」についても５５％が重視していると回答しており、防災教育プログラムに参加したことによる影響も考えられる。従来から取り組んでいる「危険予測・主体的な行動」の重要性はもちろんのこと、「社会貢献、支援者の基盤」の重要性についても認識が深まったと推察される。

図表２－１　生徒への防災教育に関して、どのようなことを重視していますか

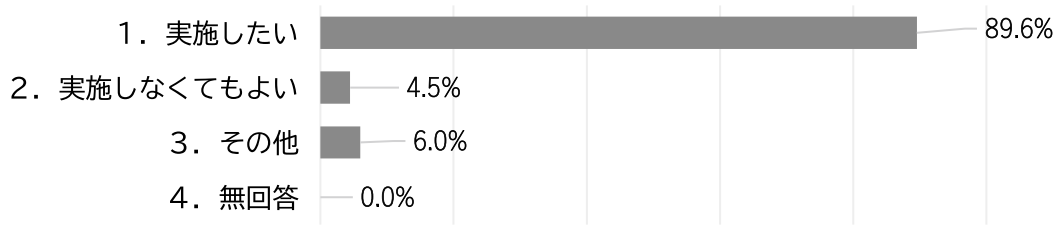


３　地域みらいねっとの「防災教育プログラム」について

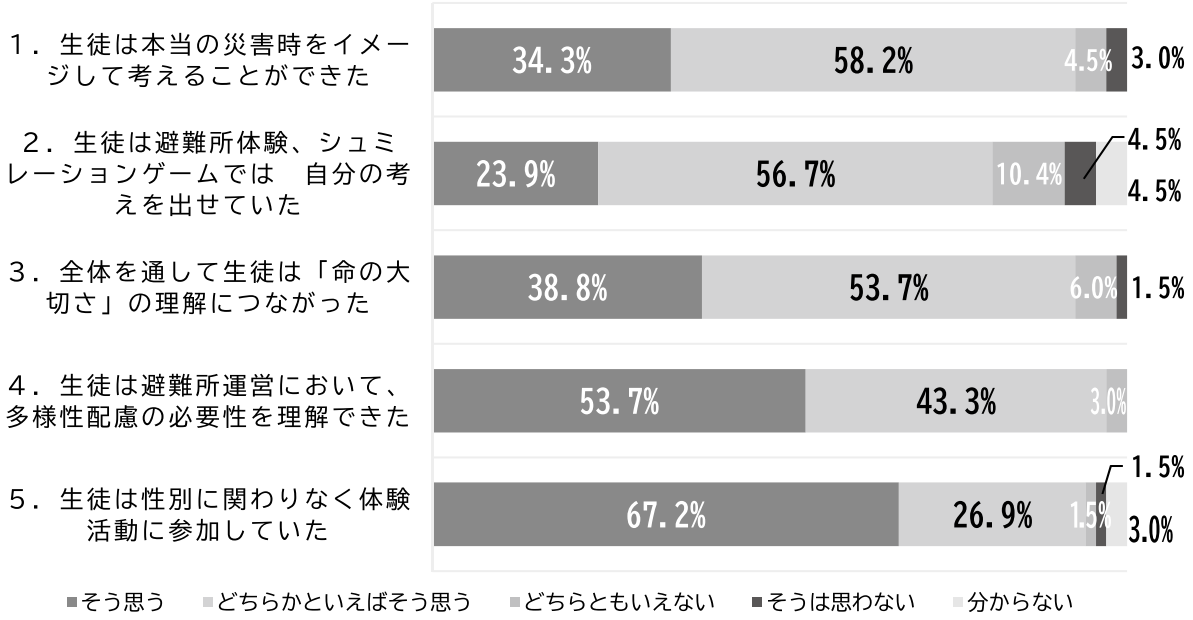
今後も防災教育プログラムを実施したいかについては、図表３－１のとおり、９割が「実施したい」と回答している。

実施目的に対する成果としては、図表 ３－２のとおりである。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた『ほぼそう思う』で各項目を比較すると、４の「多様性配慮の必要性」が97.0%で最も多く、ついで、５の「性別に関係なく体験活動に参加していた」が94.1%であった。この結果からジェンダー視点を取り入れた防災教育は、教員から見ても一定の成果が認められたと推測できる。

図表３－１　今後も今回の「防災教育プログラム」を実施したいと思うか



図表３－２　実施目的ごとの成果について



生徒の反応を見てどのように感じたのかおよび実施しての感想を自由記述で質問したところ、９割の教員の記述があった。図表３-３に本調査の趣旨にそって、「ジェンダー視点、多様性配慮の観点」「学校教育としての必要性の観点」「教員自身の学び」に分類しまとめた。

体験の重要性について記入している教員が非常に多かった。また、避難所生活での性差による困難事項やジェンダーの問題などに対する教員自身の気づきの内容もあった。また、図表３－２以外にも、防災教育プログラムの内容については、「もっと体験を増やして欲しい」「講話が長い」「学校との事前打ち合せが必要」などの提案も示された。

図表３－３　生徒の反応、実施しての感想（自由記述）

内容のカテゴリー	コメントの内容
ジェンダー視点、多様性配慮の観点（社会の脆弱性の改善）	講話から、災害時や避難所での男女格差があることに初めて気づいたと思います。男子生徒が、女性への理解が深まったり、女子生徒が意見を述べることの大切さに気づくきっかけになった。
	意見の多様性の気づき。
	多様な避難者への対応の難しさを感じ取っていた。
	日頃から支援が必要な弱い立場の人々に目を向けることや、誰もが生活しやすいコミュニティのあり方などについてなど、様々な視点で考えるきっかけとなった。
	防災教室の中に、感染症対策、多様な人への配慮、男女共同参画、命の大切さ、中学生 にできること等、多様な内容が含まれていてとてもよかったと思います。
	とても意味のある時間だったと思います。自分も東日本大震災や鬼怒川氾濫、台風 19 号被害の被災地にボランティアに行ったことがありますが、そこに住む人の避難所で暮らさなければならない事になったときの大変さは、ぜひ子どもたちにも何かの機会に考えさせる場があればとずっと感じていました。
	「避難所で女性が困ったことについての話」、「自分たちに身近な沖館中学校が避難所になった時の話」に特に関心を示した。
学校教育としての必要性の観点	実際の体験活動の多く、非常に楽しそうに活動していた。また、中学生として何ができるか考えながら実施していた。
	やる前とやったあとでは生徒の意識の変化が見られた。
	避難所運営マニュアルだけではなく、実際の運営・体験をしてみないとわからないことが多いように思いました。
	毎年実施することの大切さを改めて実感した。
	予定には入っていなかった「避難所を作る」ところを生徒が一緒になって行うことができたことが、素晴らしい体験になったと思います。何に気をつけ、どのような避難所になればよいかの知識があるのとないのでは大きく違うはずです。今回は参考になることが多かったと思います。
	実際見たり聞いたりできたこと、そして、何より体験できたことが、「学び」につがったと思います。生き生きとした表情や動きが、普段より多く見られました。
	災害の話を真剣に聞き、実際の動きを体験することで自分のことのように捉えて動いていた。
その他（教員自身の学び）	防災教育と男女共同参画がどのように関係しているのかを中学生だけでなく、災害時に避難所の運営に関わる大人（教職員）も学ぶことができ、とても貴重な時間でした。
	TV では報道されない真実や話に触れ、私自身が大変引き込まれました。「中学生の力も大きな力の一つ」という言葉も響きました。まさしく、「百聞は一見に如かず」！
	防災教育について、必要性は感じつつも実際の場面を想定しての具体的で継続的な教育には至っていないのが現状。今回の機会をきっかけに、防災教育について考えていきたいと思いました。
	私は家庭科の授業を担当していますが、家庭科の住居分野でも災害への備えについて学習する場面があります。その際に避難所のことや非常持出袋について触れるのですが、今回のプログラムは家庭科教員の立場からも大変理解を深めることのできる貴重な時間でした。これまで写真や動画でしか見てこなかったものを、実際に自分の目で見て感じることで、これからは実体験として生徒に話すことができます。

Ⅲ　参考資料

Ⅰ　中学生　　単純集計　　N＝975

青森市中学生防災教育プログラム事後アンケート

防災教育の授業、お疲れさまでした。このアンケートは参加された皆さんが今日の授業を通してどのようなことを気づき、考えたかについて知りたいと思っています。この結果は今後の実践や研究以外で用いることはありません。また個人が特定される形で公表することもありません。

今回の授業を振り返りながら、率直にお答えくださいますようお願いいたします。

一般社団法人　男女共同参画地域みらいねっと

問１　あなたの性別

1.　男性（49.9%）　　2.　女性（47.7%）　　3.　その他（2.4%）

問２　学年

1.　１学年（11.1%）　　2.　２学年（43.1%）　　3.　３学年（40.4%）

4.　小学５、６年生（4.3%）　　５．　回答しない（1.1%）

問３　地域・学校で防災訓練（避難訓練は除く）に参加したことがありますか

1.　はい（37.8%）　　2.　いいえ（61.7%）　　3.　その他（0.4%）

問４　防災教育プログラムに参加していかがでしたか　　（%）

	あてはまる	まあ、あてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
１．防災教育プログラムでは、本当の災害をイメージして考えることができた。	64.3	31.6	3.6	0.5
２．地域には要配慮者といわれるいろいろな人がいることを考えることができた。	80.0	18.3	0.8	0.6
３．地域で実施する防災教育に参加したいと思う。	39.8	41.8	13.1	5.0
４．防災教育プログラムで自分の考えを言うことができた。	34.8	27.1	21.1	16.7
５．防災教育プログラムで他人の考えを聞くことができた。	79.3	16.8	2.9	1.0
６．全体を通して、「命の大切さ」を理解できた。	86.6	11.9	1.0	0.5
７．実施後、防災について家族で話をした。	31.2	28.0	18.3	20.9

問５　あなたは家の中で、食事のしたくや、そうじ、洗濯のような家事は、誰がやるのが一番良いと思いますか。一つだけ選んでください。

1.　男の人が主にやるのがよい（0.8%）
2.　女の人が主にやるのがよい（3.8%）
3.　女の人と男の人が協力してやるのがよい（86.7%）
4.　わからない（4.5%）
5.　その他（4.7%）

問６　「男は仕事・女は家庭」という考え方がありますが、あなたはこの考え方についてどう思いますか。一つだけ選んでください。

1. そう思う（2.4%）
2. どちらかといえばそう思う（10.4%）
3. どちらともいえない（25.6%）
4. どちらかといえばそう思わない（11.4%）
5. そうは思わない（44.2%）
6. 分からない（5.7%）

問７　あなたは一般的に女性が仕事を持つことについて、どのように考えますか。
一つだけ選んでください。

1. 仕事を持ち続けるのはあたり前だと思う（12.0%）
2. ずっと仕事を持ち続けるほうがよい（10.5%）
3. 結婚するまでは仕事を持つほうがよい。（将来、また就職するかどうかにかかわらず）（4.2%）
4. 子どもができるまでは仕事を持つほうがよい。（将来、また就職するかどうかにかかわらず）（8.7%）
5. 女性は仕事を持たないほうがよい（0.6%）
6. どちらでもよい（特にこだわらない）（59.7%）
7. わからない（4.3%）

問８　防災リーダーは男性のほうが良い

1. そう思う（11.7%）
2. どちらかといえばそう思う（11.1%）
3. どちらともいえない（32/7%）
4. どちらかといえばそう思わない（7.0%）
5. そうは思わない（31.1%）
6. 分からない（6.5%）

問９　中学生でも地域のために役に立てることがある　（訓練の中で、気づいたり、考えたりしたことを、具体的に書いてください）　［自由記述］　　記入率（86.4%）

問10　災害時や避難所で、性別（男性もしくは女性）によってニーズが違う　（訓練の中で気づいたり、考えたりしたことを具体的に書いてください）［自由記述］ 記入率（79.3%）

問11　高齢者や障害者、妊産婦、乳幼児を抱えた人などへの配慮が必要である（訓練の中で、気づいたり、考えたりしたことを具体的に書いてください）［自由記述］ 記入率（82.4%）

問12　その他、普段では気づかないことに気づいたことはありますか。もしあれば自由にお書きください。［自由記述］　　記入率（42.7%）

事後アンケートの問５，６，７，８については、**［事前アンケート］**で同様の問いを質問している。

２　教員　単純集計　　n＝６７

青森市中学生防災教育プログラムを終えてのアンケート

防災教育の授業、お疲れさまでした。このアンケートは参加された皆さんが今日の授業を通してどのようなことを気づき、考えたかについて知りたいと思っています。この結果は今後の実践や研究以外で用いることはありません。また個人が特定される形で公表することもありません。

今回の授業を振り返りながら、率直にお答えくださいますようお願いいたします。

一般社団法人　男女共同参画地域みらいねっと

フェースシート

問１　学校でのお立場を教えてください。

１　教頭（1.5%）　２　教務主任（6.0%）　３　生徒指導（10.4%）
４　学年主任・副主任（6.0%）　５　養護教諭（9.0%）　６　学年担当（7.5%）
７　学級担任（19.4%）　８　その他（17.9%）

問２　今回実施した「防災教育プログラム」の実施内容について教えてください。

１　Ａパターン（シュミレーションゲーム等＋地域住民との避難所運営体験）（6.0%）
２　Ｂパターン（クロスロードゲーム等）（11.9%）
３　Ｃパターン（避難所運営体験）（71.6%）
４　Ｄパターン（避難所運営体験＋ワークショップ）（10.4%）

問３　地域住民も参加しましたか

１　参加した（37.3%）　２　参加していない（62.7%）

学校における防災教育について

問１　勤務校における防災教育の現状について

１　十分だと思う（32.8%）　２　少し不足している（62.7%）　３　不足している（4.5%）
４　その他（0.0%）

問２　問１で「少し不足している」「不足している」と回答された場合のみ、その理由をお答えください。（複数回答可）

１　予算がない（11.9%）　２　時間がない（49.3%）　３　教材がない（28.4%）
４　教える人がいない（38.8%）　５　その他（16.4%）

問３　勤務校における防災教育の実施頻度（回数）について　＊避難訓練は除く

１　１年に１回程度（74.6%）　２　各学期に１回程度（17.9%）
３　１か月に１回程度（0.0%）　４　その他（7.5%）

問４　これまで実施したことがある防災教育の内容について（複数回答可）＊前任校も含む

１　避難訓練（94.0%）　　２　防災講話（34.3%）　　３　防災ワークショップ（20.9%）

４　防災マップづくり(14.9%)　　５　防災キャンプ(4.5%)　６　消防･防災施設の見学(22.4%)

７　避難所運営訓練（体験）(49.3%)　　８　その他（4.5%）

男女共同参画地域みらいねっとが実施した防災教育プログラムについて

問１ 防災教育プログラムを実施した理由（複数回答可）

１　防災教育の必要性を感じていたから（28.4%）

２　防災教育プログラム内容に関心があったから（20.9%）

３　学校として受ける（実施する）ことが決まっていたから（77.6%）

４　その他（4.5%）

問２　実施目的ごとの成果について　　（%）

単位　%	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	そうは思わない	わからない
①　生徒は本当の災害時をイメージして考えることができた	34.3	58.2	4.5	3.0	0.0
②　男子は女子よりも自分の考えを言うことができた	9.0	17.9	56.7	6.0	10.4
③　男子は女子よりも他の人の考えを聞くことができた	6.0	16.4	62.7	4.5	10.4
④　全体を通して、生徒は「命の大切さ」の理解につながった	38.8	53.7	6.0	1.5	0.0
⑤　生徒は避難所運営において、多様性配慮の必要性を理解できた	23.9	56.7	10.4	4 .5	4. 5
⑥　生徒は、性別に関わりなく体験活動に参加していた	67.2	2 6.9	1.5	1.5	3.0

問３　生徒の反応をみてどのように感じられましたか。(ご自由にお書き下さい)　記入率(88.1%)

問４　実施しての感想をお聞かせ下さい。(ご自由にお書き下さい)　記入率（88.1%）

問５　今後も今回の防災教育プログラムを実施したいと思いますか。

１　実施したい（89.6%）

２　実施しなくても良い（4.5%）

３　その他（6.0%）

中学校における防災教育について

問１　生徒への防災教育に関して、どのような点を重視していますか。（３つまで）

１　地域で予想される災害や、過去の災害について理解と関心を持ち、地域の課題を見いだすこと　（47.8%）

２　災害に対する備えができるようになること　（58.2%）

３　災害からの危険を予測し、自らの安全を確保するために主体的に行動ができること（67.2%）

４　災害時に率先して避難行動ができること　（43.3%）

５　災害時、性別にかかわりなく意見を出し、行動できる態度の形成　（9.0%）

６　多様な人、支援が必要な人の立場を理解し、災害時に他の人や地域の安全に役立つことができるようになる　（55.2%）

７　災害や困難を乗り越えて生きていく力を身につけること　（17.9%）

８　その他（1.5%）

問２　今後、防災教育としてどのようなことをしたいですか。（複数回答可）

1 避難訓練（55.2%）　2 防災講話（16.4%）　3 防災ワークショップ（49.3%）

4 防災マップづくり（29.9%）　5　防災キャンプ（28.4%）　6　消防・防災施設の見学（10.4%）　7　避難所運営訓練（46.3%）　8　その他（0.0%）

問３　中学校における防災教育の課題や困りごとがあればご記入ください。

（ご自由にお書き下さい）　記入率（31.3%）

第３章　中学生の「防災教育プログラム」の成果と考察

このアンケート調査は青森市内の中学校で実施した防災教育プログラム（避難所運営体験）に参加した中学生の「ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成」「意思決定の場に自ら参画する態度」「災害や困難を乗り越えて生きていく態度」にどのような変化がみられたかを明らかにしたものである。分析にあたっては主に性別や事前アンケートと事後アンケートの比較をとおして検証した。

１　中学生を対象としたアンケート結果から

ジェンダーの視点を取り入れた避難所づくりは、災害からどう命を守るかとともに、被災した後、どう乗り越えていくかの気づきのツールになっていることがアンケート結果からも明らかになった。特に多様性配慮の避難所づくりに関しては自由記述でも多くの中学生の気づきのコメントや、課題に対し向き合い自ら何をすれば良いかの提案まで書かれていた。教員からも「中学生としてなにができるか考えながら実施していた」などのコメントもあった。また、要配慮者役を中学生が担当したが、高齢者や幼児は身近にいるので支援の仕方を想像しやすいが、聴覚・視覚障がい者や身体障がい者は身近にいないため、どんな困りごとが生じるのか想像しにくいなど、生活上の経験が希薄であることをふまえると事前説明や学習の時間をもっと取ることができていれば、より一層「要配慮者への支援」に対する理解が深まったと考えられる。

ジェンダー視点を取り入れた市民的態度の育成における図表３－４の結果を見ると、男女の意識の伸び率はほとんど変わらず、効果に対する男女差はなかったと推測できる。一方、図表３－１～２および図表４－１をみると、ここでは日常におけるジェンダー意識に男女差があることがわかる。また、生徒の自由記述からは、固定的な性別役割分担意識が中学生でも根強いことが推測される。これは、１０数年間の家庭や社会によって形成されたジェンダー意識の表れである。教育において早い段階からのジェンダー教育の必要性を提案するものであり、学校教育でも家庭教育でも担うことができない部分を外部講師（防災教育プログラム）で補填する必要があると感じる。

防災における女性リーダーの必要性については事前アンケートと事後アンケートでは明確に意識の変化がみられた。特に女性は伸び率が１．２７と高い数字となっている。女性の方がリアルに気づき「自分ごと」としてとらえることができたと推測できる。

体験をとおしての気づきや行動に関する質問項目の結果をみると、女性の回答が男性よりも低かったのは「自分の考えを言うことができた」の「あてはまる」の回答で３．７ポイント低かった。しかし、他の質問項目を見ると女性の方が達成度は高かったことからも、自己効力感を高めこうした項目への回答を高くしていくことが女性リーダーの育成につながると考えられる。

また、参加した中学生の行動変容については、アンケート調査の結果からわかることは、「実施後に家庭で防災について話をした」の質問のみであり、６割の生徒が「話した」と答えてい

た。そこで、アンケートとは別に地域みらいねっとで把握しているものをここで明記する。
〔青森市立東中学校〕３年間ジェンダー視点の防災教育を実施してきた東中学校では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で３年生は修学旅行に行けなかった。希望者を対象にＰＴＡとおやじの会が学校と連携して、「防災宿泊訓練」を実施した。体育館に段ボールベットや間仕切りを組み立て宿泊を体験した。また、美術部員の「誰が見てもわかりやすい避難所にしたい」という発案で、「避難所ピクトグラム」を制作し、学校に展示している。
〔青森市立古川中学校〕避難所運営体験を実施した２年生が講師になって、学区内の千刈小学校と古川小学校の全校児童にオンラインをとおして、防災教育伝達プログラムを実施した。防災について学んだこと（特に実際に行った避難所運営）を中心に伝えた。
〔青森市市立新城小学校〕総合的な学習の時間で防災について学習していた新城小学校では、地域みらいねっとの防災教室後、避難所となる教室の割り振りを見直した校舎配置図や、地域の危険箇所を紹介するスライドを作成し、学習発表会で発表した。
このように防災教育の実施後の生徒の行動変容につなげるためには、学校や教員の熱意と地域の力も必要といえる。

２　教員を対象としたアンケート結果から

東日本大震災における『避難所の運営状況について』（文部科学省（2012）東日本大震災における学校等の避難所運営に関する調査報告書）[1] によると、発災直後には教職員が運営を担わざる得なかったことがわかる。そのような観点からも、本事業の防災教育プログラムでは、教員の防災意識や災害時の対応について知識の向上も企図したが、避難所のモデルルームの設営や講話をとおして理解につながったと推察される。
また、教員には、各教科の学習指導要領等に留まらず、既存の教科内容にこだわらない、社会学や経済学など、社会科学系の知識の重要性と被災を乗り越えていく力の育成の重要性を本プログラムを通して感じ取って欲しいと考えた。また、「実施しての感想」を質問したところ、多くの教員はジェンダー視点を取り入れた防災教育に共感でき必要と記述している。
その他にも、教員の感想には、講話を減らし体験を増やして欲しいなどのコメントがあったが、P7～17を見てもわかるように、中学生は防災教育プログラムをとおして教員が感じている以上に社会的な課題も含め、様々なことを習得していることがわかる。今後は、アンケート結果を教員にフィードバックすることで本プログラムと従前の防災教育の違い（特に、被災したあと、どうそれを乗り越えるかというレジリエンスの力の育成）に気がつく契機となることを期待したい。

３　おわりに

これからの防災教育には、自然現象への対応力と社会の脆弱性の改善が必要である。災害に対する女性の脆弱性、また世界と国の防災に関する政策におけるジェンダー視点の導入状況をみれば、防災教育にジェンダーの視点を取り入れることは急務である。

今回の調査の結果、生徒が避難所を漠然としたイメージではなく、生活する場として具体的に想像することができたと推測できる。日常では知ることのなかったジェンダー、また多様性に対する課題が自分の身近にもあることに気づいた生徒が多かった。このようにジェンダーの視点は、避難所運営の上での重要な具体的課題であるため、模擬的な場面が参加者の臨場感や緊張感を助長し、避難所という状況下で課題解決を図る「気づきのツール」ともなっていることがわかる。中学生に対する地域みらいねっとが実施した防災教育プログラムは、ジェンダー視点の観点からも一定の成果はみられた。

学校教育では問題が先に与えられ、生徒が答えを出すことを求められることが多い。しかし、本プログラムでは、体験を通じて生徒自ら問題（社会的課題）を見つける。そして、その見つけた問題（社会的課題）に対して「では、どうしたらよいか」を考える。さらに、その答えには正解がないことを容認することで、さらに深く追求する力を育むことになっていく。

防災教育といえば、Ｐ２の「２　学校教育における『防災教育』の現状」で前述したとおり、避難訓練など被災したときに被害を最小限に食い止める知識を得、規律を体得することに焦点が置かれがちである。確かに早急に自分の命を守る行動は絶対必要なことではある。しかしながらこのような遠回りするようなところで人の心は育ち、自分の命も人の命も大切にできる人間が育つものではないだろうか。

今後の課題としては、いかにして、ジェンダーの視点を取り入れた防災教育を継続していくかである。教員のコメントに「上級生や教員・地域の方々のサポートを受けながら、実際に避難所運営体験を実施したほうが、持続可能な意味のある体験になると思った」という意見があった。また、地域みらいねっとだけの取り組みでは限界があるのも確かである。そのような現状からも、『地域の人々』も一緒にがジェンダー視点を取り入れた防災やレジリエンスなどについて学び、取り組めるようになることが必要である。

中学校は毎年、新しい生徒が入学してくる。学校×地域住民×ジェンダー視点を持った地域みらいねっとのような団体との連携で“持続可能な社会の創り手”を育成する可能性はみえてくると思われる。

地域みらいねっとが取り組んでいる防災教育は生き方教育でもあると捉えている。学校教育の限られた時間のなかで、いかにそれを効率よく伝えていくか、常にブラッシュアップが必要と考える。

最後に、「誰一人取り残さない」という SDGs の理念に向け、

・ジェンダー平等や多様性配慮への気づき

・防災意識の向上

・「持続可能な社会の創り手」の育成

をめざし、多様な組織や人々とのパートナーシップで、今後も取り組んでいきたいと思う。

……

＜参考文献＞

１） 文部科学省.「東日本大震災における学校等の対応等に関する調査研究報告」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1323511.htm, (2021-12-10)

■資　料

メディア掲載記事等

コロナ下の防災 心構えは

感染対策、避難所運営…

筒井中2年生 学ぶ

青森市の一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと（小山内世喜子代表理事）は8～11月に青森市内の1小学校と8中学校で、子どもたちに災害への備えや避難所運営について学んでもらう体験教室を開いている。19日は岡市の筒井中学校で、最初の体験教室を開催し、2年生179人が新型コロナウイルスの感染防止対策を踏まえた防災や災害時の心構えなどについて学んだ。

小山内代表理事は東日本大震災や熊本地震が発生した際の避難所の様子などを説明。同ウイルス感染防止のため、水のほかに、マスクや体温計、消毒液も入った非常用持ち出し袋を準備するようアドバイスした。

また、安心できる避難所を運営するため、組織運営づくり、空間づくり、避難所のルールが重要だと強調。「女性や子どもたち、病気を持った人など多様な人がいることを知り、思いやりの心を忘れなければ、誰一人取り残さない避難所運営ができる」と述べた。

この後、生徒たちが会場内に設置された授乳室や簡易トイレ、段ボール製のベッドなどを見たり、触れたりして避難所の雰囲気を体験した。

菊地愛理さんは「段ボール製のベッドは結構寝やすかった。普段から防災について考えることや、災害時には自分が主体的に動くことが大事だと思った」と話した。（鈴平昌寛）

小山内代表理事（左から2人目）から段ボール製のベッドに寝た感想を聞かれる生徒

2020年8月21日東奥日報掲載

災害時の避難所運営体験

青森の中学生130人

2020年8月22日朝日新聞掲載

避難所に女性視点を

東日本大震災教訓に青森市内の中学生運営体験

男女共同参画地域みらいねっと展開

地域防災担い手期待

男女共同参画の視点を取り入れた中学生対象の避難所運営体験が年度、青森市内の中学校で実施されている。「東日本大震災の教訓を踏まえたもの。プログラム全実施する「男女共同参画推進フォーラム」（独立行政法人国立女性教育会館主催）で、「誰一人取り残さないみらいねっとの小山内世喜子代表理事は「誰一人取り残すことのない地域防災を、若い世代に担ってほしい」と期待を寄せる。（＝山祝紘）

自分たちで設営した授乳スペースなどを確認する生徒たち

2021年5月4日陸奥新報掲載

■避難所運営体験終了後にインタビューを受ける小山内代表

メディア掲載一覧

2019年
6/28
読売新聞
8/28
読売新聞
9/6
毎日新聞

2020年
8/21
東奥日報
8/22
朝日新聞
8/26
読売新聞
8/31
東奥日報
9/3
河北新報
8/21放送
青森テレビ
青森放送
青森朝日放送
NHK青森
9/20
青森テレビ
9/1
FMあおもり

2021年
4/29
毎日新聞
5/4
陸奥新報

1

男女共同参画の視点を取入れた防災教育を広げるプロジェクト

① 情報発信（防災教育プログラムの紹介）

- 10/8　令和３年度「男女共同参画の視点による災害対応研修」講師（独立行政法人国立女性教育会館主催）
- 11/7　ぼうさいこくたい 2021（内閣府主催）
  セッション「次世代に「つなげる」、SDGs・ジェンダー視点を取入れた中学生防災教育」開催
- 12/5，12/8　令和３年度「男女共同参画推進フォーラム」（独立行政法人国立女性教育会館主催）
  ワークショップ「次世代に「つなげる」、ジェンダー視点を取り入れた中学生防災教育」開催

②「誰一人取り残さない防災教育」プロモーションビデオの制作

Japan. Committed to the SDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

第５回ジャパン SDGs アワード
「特別賞」受賞
テーマ「誰一人取り残さない地域防災・ジェンダー視点を取り入れた防災教育には SDGs の目標がいっぱい」

「ジェンダー視点を取り入れた防災教育」調査報告書

発行　　2022 年 3 月 15 日
発行者　一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと
調査･編集担当　小山内世喜子　　佐藤和子　　岩本ヤヨエ
問合せ　〒030-0841
青森県青森市奥野 2 丁目 1－18－505
TEL　090-8789-2724　FAX　017-775-5313
メールアドレス　　g.mirainet@gmail.com
ホームページ　　https://aomori-mirainet.com/

この報告書は、（公財）むつ小川原地域・産業振興財団の支援を受けて作成しています。